

執行役員CFOの佐藤でございます。

それでは、お手元の資料に従いまして2007年3月期、第1四半期の決算概要についてご説明申し上げます。

まず、資料に関する2ページ目の注意事項をご確認の上、4ページをご覧ください。

(注)

本資料に記載されている当社および連結子会社(以下NECエレクトロニクスと総称します。)の計画、戦略および業績見通しは、将来の予測であって、リスクや不確定な要因を含んでおります。実際の業績等は、さまざまな要因により、これら見通し等とは大きく異なる結果となりうることをあらかじめご承知願います。実際の業績等に影響を与えうる重要な要因としては、NECエレクトロニクスの事業領域を取り巻く日本、北米、アジア、欧州等の経済情勢、市場におけるNECエレクトロニクスの製品、サービスに対する需要動向や競争激化による価格下落圧力、激しい競争にさらされた市場においてNECエレクトロニクスが引続き顧客に受け入れられる製品、サービスを供給し続けていくことができる能力、為替レート(特に米ドルと円との為替レート)などがありますが、これら以外にもさまざまな要因がありえます。また、IT不況や通信不況に伴う世界経済の悪化、世界の金融情勢の悪化、国内外の株式市場の低迷などにより、実際の業績等が当初の見通しと異なる結果となる可能性もあります。

I . 2007年3月期 第1四半期 業績概要

II . 2007年3月期 業績の見通し

III . 業績改善基本方針の進捗状況

売上高・損益

(億円)	06/3期		07/3期		
	1Q	4Q	1Q		
	実績	実績	実績	前期比	前年同期比
売上高	1,461	1,703	1,652	△51	+191
半導体売上高	1,403	1,620	1,581	△40	+177
営業損益	△98	△165	△58	+107	+40
(売上高比%)	△6.7%	△9.7%	△3.5%	+6.2%ポイント	+3.2%ポイント
税前損益	△108	△243	△48	+195	+60
当期純損益	△63	△878	△61	+817	+2
(売上高比%)	△4.3%	△51.5%	△3.7%	+47.8%ポイント	+0.6%ポイント

注1: 当社は米国会計基準を採用しておりますが、「営業損益」は売上高から売上原価、研究開発費、販売費および一般管理費を差し引いたものです。

注2: 為替レート実績: 2006年3月期 第1四半期 1US\$=107円、1Euro=138円

2006年3月期 第4四半期 1US\$=117円、1Euro=141円

2007年3月期 第1四半期 1US\$=115円、1Euro=142円

NEC ELECTRONICS.....

第1四半期の実績サマリーです。

当四半期の連結売上高は1652億円と、前年同期に比べて191億円(13%)の増収、前四半期に比べると51億円(3%)の減収となりました。

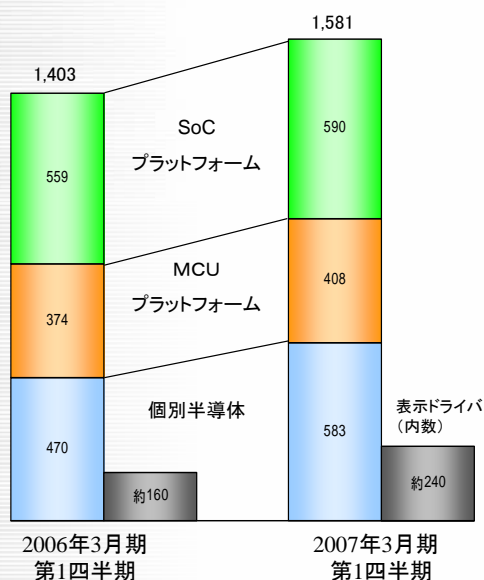
また、営業損益は、58億円の損失で、前年同期に比べて40億円の改善となりました。また、前四半期に比べると107億円の改善となりました。前四半期においては、技術資産の一括処理、約90億円の計上がございましたので、実質は17億円の改善となります。

また、税前損益、当期純損益も前四半期と比べて繰延税金資産処理などの関係で大幅な改善となりました。

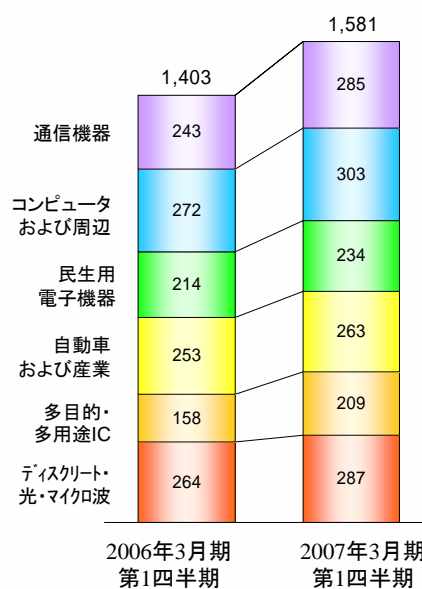
以下、営業の概況について詳しくご説明いたします。

半導体売上高 前年同期比較

プラットフォーム別



アプリケーション別



NEC ELECTRONICS

(単位:億円)

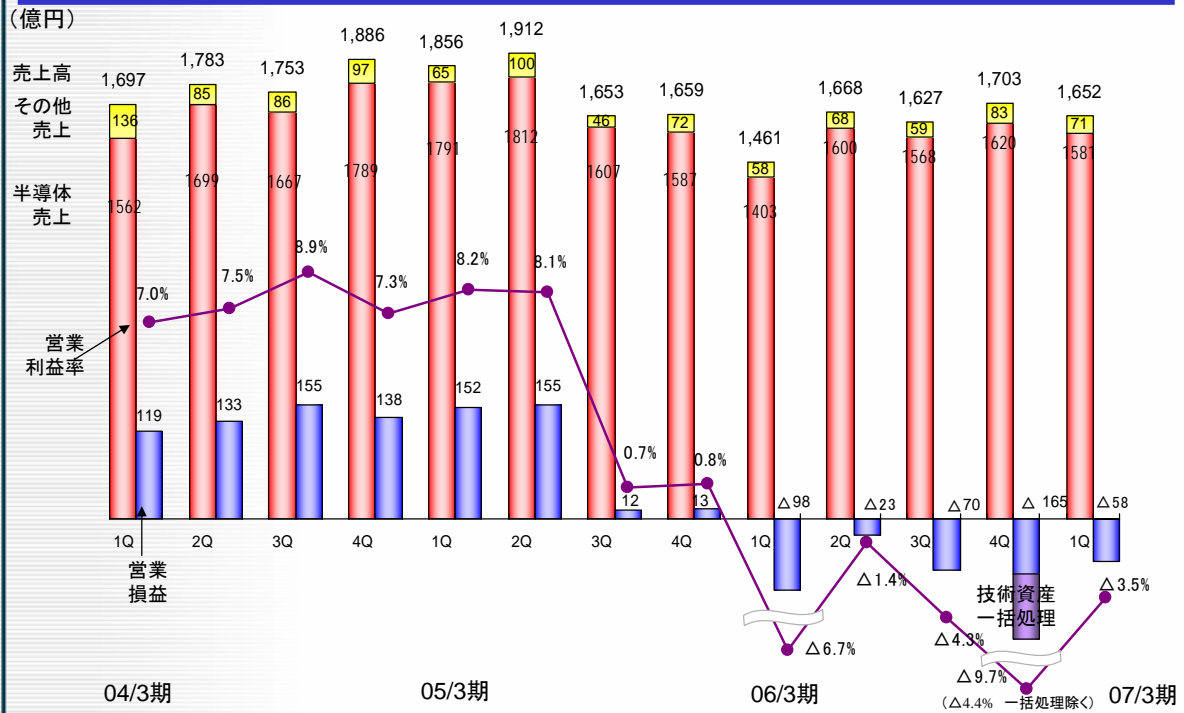
5

5ページは前年同期との売上高の推移を示したものです。

こちらの説明はお手元の決算短信での説明しておりますが、各プラットフォーム、各アプリケーション分野で売上高が伸張しましたが、主に液晶ドライバIC、汎用マイコンの売上高が増加いたしました。

1年前の第1四半期を底として着実に売上は回復基調となっております。

四半期別業績推移

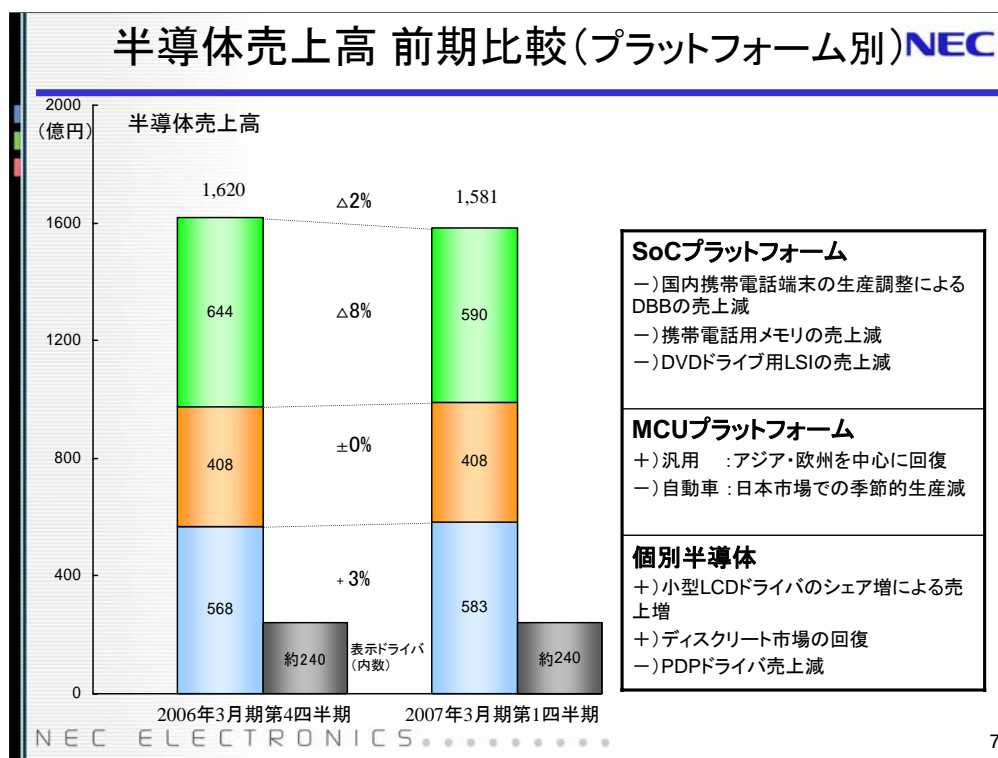


注1: 当社は米国会計基準を採用しておりますが、「営業利益」は売上高から売上原価、研究開発費、販売費および一般管理費を差し引いたものです。
 注2: 2004年3月期第4四半期は、営業利益から厚生年金代行返上益(18.7億円)を除いた額を表示しております。

6ページのグラフは、四半期単位の業績の推移です。

前年同期比、前期比とも営業利益は改善しているものの、残念ながら、業績の回復はいまだ力強いものとは言えません。

半導体売上高 前期比較(プラットフォーム別) NEC



7ページの表は半導体売上高を、プラットフォーム別に分類して前四半期と比較したものです。

SoCプラットフォームの売上高が前四半期と比べて8%減少しましたが、これは携帯電話用のデジタルベースバンドLSI、システムメモリ、また、DVDドライブ用のLSIの売上が減少したことによるものです。

また、MCUプラットフォームの売上は前四半期と比べて横ばいとなりました。これは、汎用マイコンはアジア、欧州向けを中心に回復基調にあるものの、自動車用マイコンは日本市場での季節的な生産減の影響を受けたことによるものです。

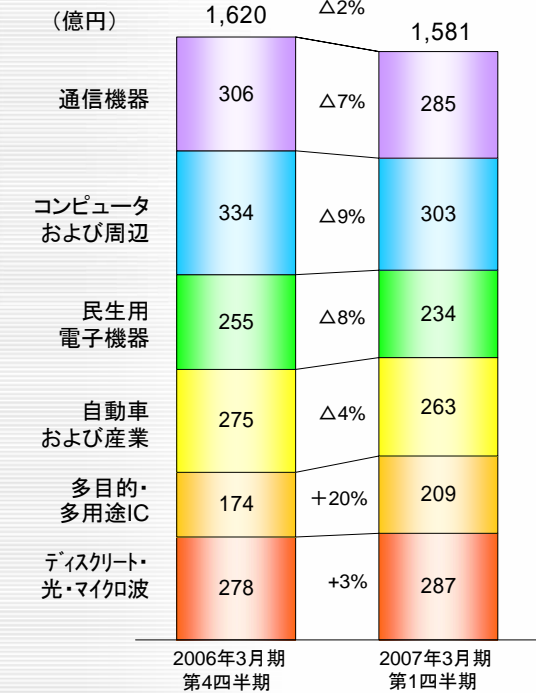
個別半導体は、前四半期と比べて3%の売上増となりました。携帯電話用などの小型LCDドライバはシェアの拡大により売上増となり、ディスクリットも市場の回復に伴う売上増となりました。

4月25日の決算発表時には、第1四半期の売上高は前四半期と横ばい程度を想定していると申しあげましたが、期初想定に対して、第1四半期の半導体売上高はSoCプラットフォームで40億円ほど下振れとなりました。

これは、一部米国顧客における在庫調整の影響に伴う出荷の時期ズレが発生したこと、携帯電話向けデジタルベースバンドLSIで、昨年度下期の国内市場での作り込みの反動を想定以上に受けたこと、DVDドライブ用LSIでパソコン市場の減速に伴う部品調達の調整を受けたことによるものです。

半導体売上高 前期比較 (アプリケーション別) NEC

半導体売上



- 国内携帯電話端末の生産調整によるデジタルベースバンドLSIの売上減
- 小型LCDドライバはシェア増による売上増
- DVDドライブの売上減
- パネル在庫調整による大型LCDドライバの売上減
- PDPドライバの売上減
- 自動車分野は日本市場向けの季節的売上減
- オールフラッシュマイコン等の売上増
- ディスクリート市場の回復

NEC ELECTRONICS

8

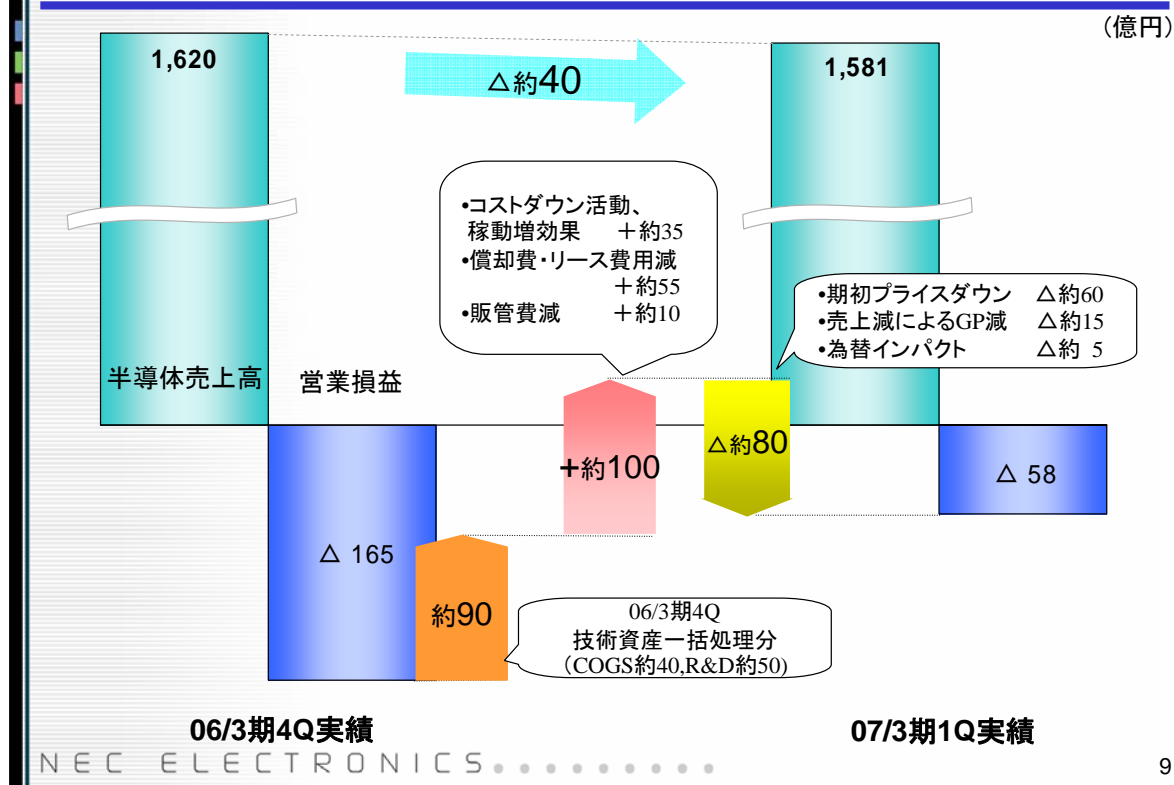
次に用途別の売上高での比較ですが、汎用マイコンが含まれている多目的・多用途ICが、新製品でもあるオールフラッシュ・マイコンのビジネスの立ち上がりなどにより前四半期と比べて増収となったほか、ディスクリート・光・マイクロ波も前四半期と比べて堅調な売上増となりました。

一方、コンピュータおよび周辺機器分野、民生用電子機器分野、通信機器分野は、スライドにお示ししている要因により売上減となりました。

1Q/4Qの利益増減要因

NEC

(億円)



9

次に、前四半期から第1四半期への損益変動要因についてご説明いたします。

まず、第4四半期の営業損失には約90億円の技術資産の一括処理が含まれていたことに加えて、減価償却費・リース料が約55億円、販管費が約10億円それぞれ減少し、また、当社グループの稼働率増加および各種のコストダウン活動による改善効果が約35億円ございました。

一方、第1四半期は期初のプライスダウンが約3%強で約60億円、売上減に伴うGP(粗利益)減で約15億円、為替の影響で約5億円の損益悪化要因があり、結果として、第1四半期の営業損益は58億円の損失となりました。

バランス・シート

NEC

(単位: 億円)

	05/6	06/3	06/6
現金および現金同等物	2,030	2,111	2,048
受取手形および売掛金	977	1,139	1,065
たな卸資産	722	725	761
有形固定資産	3,320	3,021	3,095
その他の資産	827	457	456
総資産	7,875	7,453	7,426
支払手形および買掛金	1,107	1,229	1,375
社債および借入金	1,519	1,483	1,466
その他の負債	1,335	1,617	1,551
負債	3,962	4,329	4,393
少数株主持分	39	41	41
株主資本	3,873	3,083	2,992
負債および資本合計	7,875	7,453	7,426
D/Eレシオ (グロス)	0.39倍	0.48倍	0.49倍
株主資本比率	49%	41%	40%

NEC ELECTRONICS

10

次にバランス・シートです。

当四半期末の総資産残高は7426億円と3月末と比べて27億円の減少となりました。これは、設備代金の支払いなどにより現金及び現金同等物が減少したことなどによるものです。

また、棚卸資産残高は、3月末と比べて36億円の増加となりました。これは第1四半期に米国顧客向けに出荷予定であった製品の出荷時期のズレ等によるものです。なお、第2四半期の売上増に対応して工場への投入が増加しており、当社の前工程の工場の稼働率は投入ベースで90%強と、前四半期に比べて5ポイントほど改善しております。

キャッシュ・フロー

NEC

(単位: 億円)

	06/3期			07/3期
	1Q	4Q	年間	1Q
営業活動により増加した キャッシュ・フロー	15	△5	499	78
投資活動により減少した キャッシュ・フロー	△203	△192	△547	△124
フリー・キャッシュ・フロー	△188	△197	△48	△46

NEC ELECTRONICS

11

次にキャッシュフローの状況につきご説明します。

当四半期の営業活動によるキャッシュ・フローは、当期純損失が61億円となったものの、減価償却費が189億円あったこともあり、78億円の収入となりました。

一方、投資活動によるキャッシュ・フローは、300ミリウエハラインへの設備投資などの支払いにより124億円の支出となりました。

その結果、フリー・キャッシュ・フローは46億円の支出と前年同期に比べて141億円の支出減となりました。

当社の年間のフリー・キャッシュ・フローの見通しは、期初想定どおりブレイク・イーブンを計画しております。

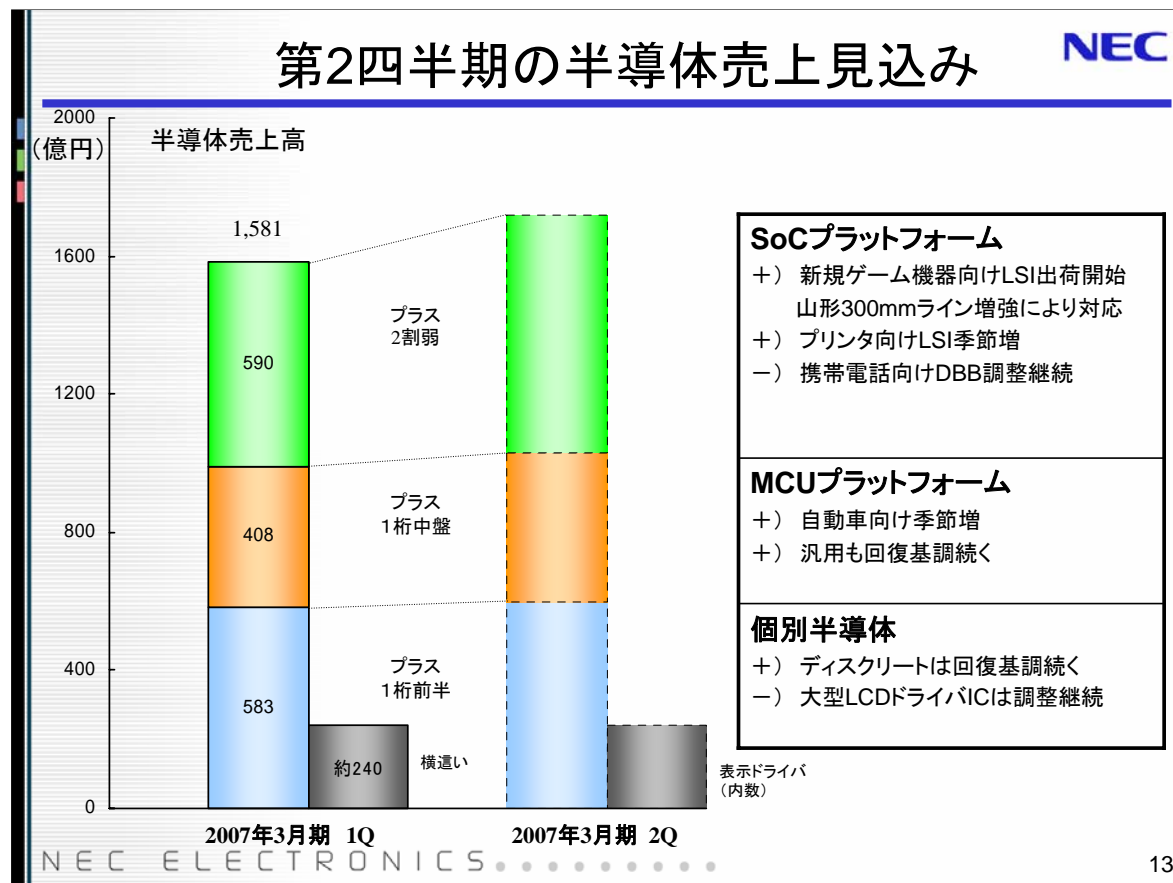
I . 2007年3月期 第1四半期 業績概要

II . 2007年3月期 業績の見通し

III . 業績改善基本方針の進捗状況

次に今年度の業績見通しについてご説明いたします。

第2四半期の半導体売上見込み



- | |
|--|
| <p>SoCプラットフォーム</p> <ul style="list-style-type: none"> +) 新規ゲーム機器向けLSI出荷開始
山形300mmライン増強により対応 +) プリンタ向けLSI季節増 -) 携帯電話向けDBB調整継続 |
| <p>MCUプラットフォーム</p> <ul style="list-style-type: none"> +) 自動車向け季節増 +) 汎用も回復基調続く |
| <p>個別半導体</p> <ul style="list-style-type: none"> +) ディスクリートは回復基調続く -) 大型LCDドライバICは調整継続 |

13ページのグラフは、第1四半期の実績と第2四半期の見通しをプラットフォーム別に示したものです。

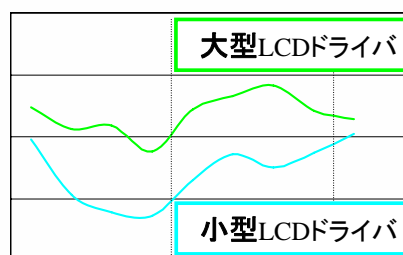
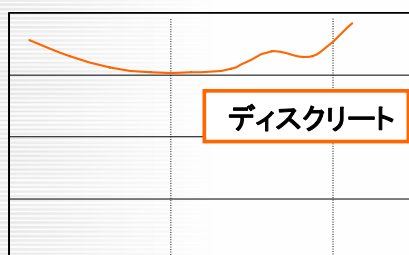
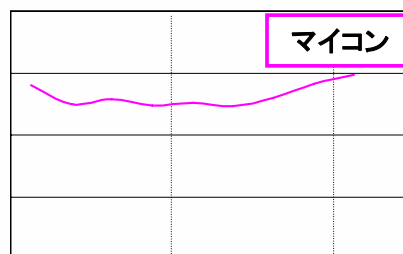
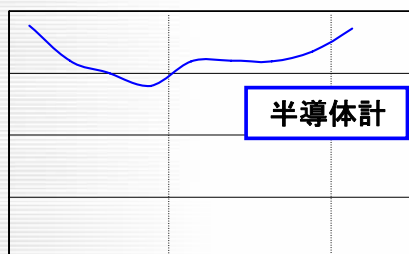
表にもお示しましたように、SoCプラットフォームの売上増が最も大きい見通しですが、これを牽引するのは半導体の市場動向とは連動しない新規のゲーム機器向けのLSIの出荷開始です。

MCUプラットフォーム、個別半導体も堅調に売上増となる見通しです。

しかし、個別半導体に含まれる表示ドライバについては、大型LCDドライバの調整が継続するものの小型LCDドライバのシェア増もあり、現時点では第1四半期に対して横這いと見込んでおりますが、今後のマーケット環境によっては下振れるリスクがあると考えております。

受注レベルの推移 (過去9四半期)

マイコン・ディスクリートを中心に回復トレンドを示すが、
民生・PC関連では下期調整リスクもあり



14ページでは、当社の四半期ごとの受注動向を、全体、マイコン、大型・小型のLCDドライバでお示しております。

収益性の高いマイコンは、当社が強化している新製品であるオールフラッシュマイコンを中心に受注は堅調であり、ディスクリートも堅調に推移しております。

しかし、大型のLCDドライバの受注は弱含んできていることについては、注視していく必要があると考えております。

今年度の業績見通し

前回(4月25日)予想から変更なし

(単位: 億円)	06/3期	07/3期		
	実績	中間予想	年間予想	前年度比
売上高	6,460	3,450	7,050	+9.1%
半導体売上高	6,191	3,300	6,800	+9.8%
営業損益	△357	△50	50	+407
(売上高比%)	△5.5%	△1.4%	0.7%	+6.2%
税前損益	△424	△70	0	+424
当期純損益	△982	△90	△50	+932
(売上高比%)	△15.2%	△2.6%	△0.7%	+14.5%
一株当たり当期純損益	△795.1円	△64.8円	△40.5円	+754.6円

注1: 当社は米国会計基準を採用しておりますが、「営業損益」は売上高から売上原価、研究開発費、販売費および一般管理費を差し引いたものです
 注2: 2006年3月期の平均為替レート実績: 1US\$=112円、1Euro=138円、
 2007年3月期の前提為替レート 上期: 1US\$=115円、1Euro=140円、 下期: 1US\$=110円、1Euro=135円
 注3: 予想値は2006年7月26日現在

NEC ELECTRONICS

これまでご説明させていただきましたとおり、1Qは想定より若干悪化いたしました。2Qは1Q比で売上高が増加し、損益も改善の見通しです。

大型LCDドライバにリスクがある一方、マイコンやディスクリートなどは堅調に回復してきています。従って、現時点では今年度の業績予想を変更する必要はないと考えております。

もちろん、下期の業績についてはもう少し状況を見極めたいと考えますが、今年度通期での営業黒字化に向けて全社一丸となって取り組んでまいりたいと思います。

I . 2007年3月期 第1四半期 業績概要

II . 2007年3月期 業績の見通し

III . 業績改善基本方針の進捗状況

最後に、4月25日に社長の中島からご説明させていただきました業績改善に向けた基本方針の進捗状況について、コメントさせていただきます。

STEP1

受注・売上の拡大

STEP2

生産能力増強と稼働向上による原価率改善

STEP3

下期からは、強い製品による利益率改善

STEP1に掲げました「受注、売上の拡大」につきましては、受注レベルは業績が好調であった前回のピーク時にまで近づきつつあり、下期はもう少し状況の見極めが必要ですが、第2四半期以降の売上拡大の確度が高まっております。

STEP2に掲げました「稼働向上による原価率の改善」につきましては、第1四半期の前工程工場稼働率は90%まで回復してきており、これにより売上高原価率も昨年度の73.9%に対して、この第1四半期は72%と改善しております。このレベルはまだ満足できるレベルにはありませんが、さらなるコスト削減を図りたいと考えております。

STEP3の「強い製品による利益率改善」につきましては、当社が今後どのような製品群に注力していくべきかを鋭意検討中であり、これらの施策を通じて株主・投資家の皆様のご期待に沿うべく、今後の業績改善に向けて継続的な努力を行っていく所存です。

これで第1四半期の決算説明を終了させていただきます。

NEC
NEC Electronics Corporation